

## 将来の活動について

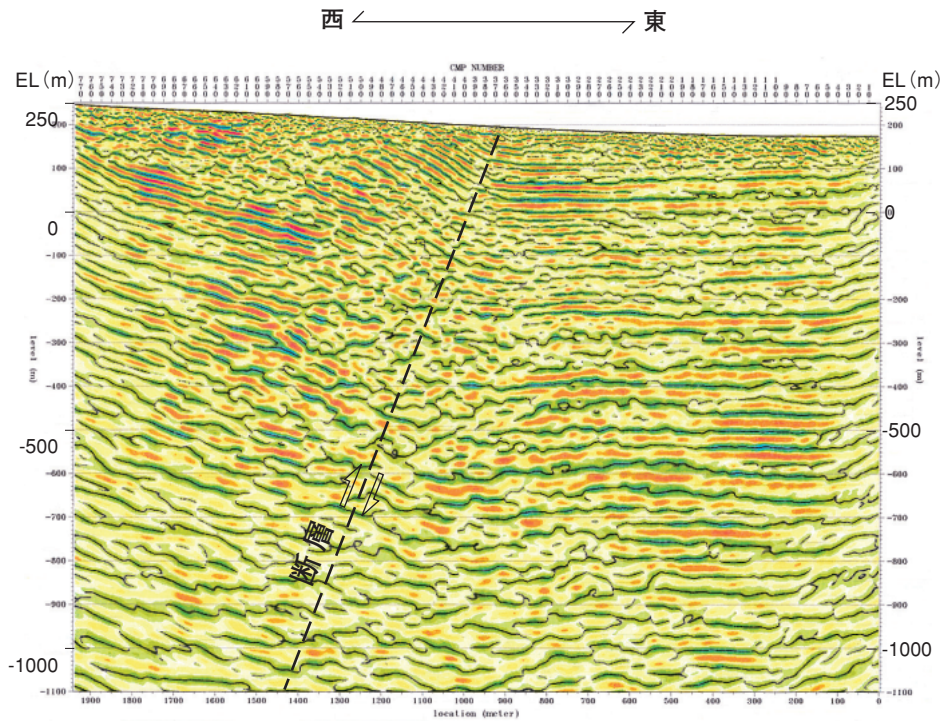
本断層帯の将来の活動により想定される地震の規模は、経験式(下記の注を参照)に基づき、断層帯の全長(35km)からマグニチュード7.4、1回の変位量(2.5m~2.7m)からマグニチュード7.3~7.4と算出されます。

この規模の地震の発生に関しては、西暦1611年の会津地震時にそれまで蓄積されたエネルギーが全て放出されたかどうか不明であることから、次の地震の切迫の程度について判断できません。

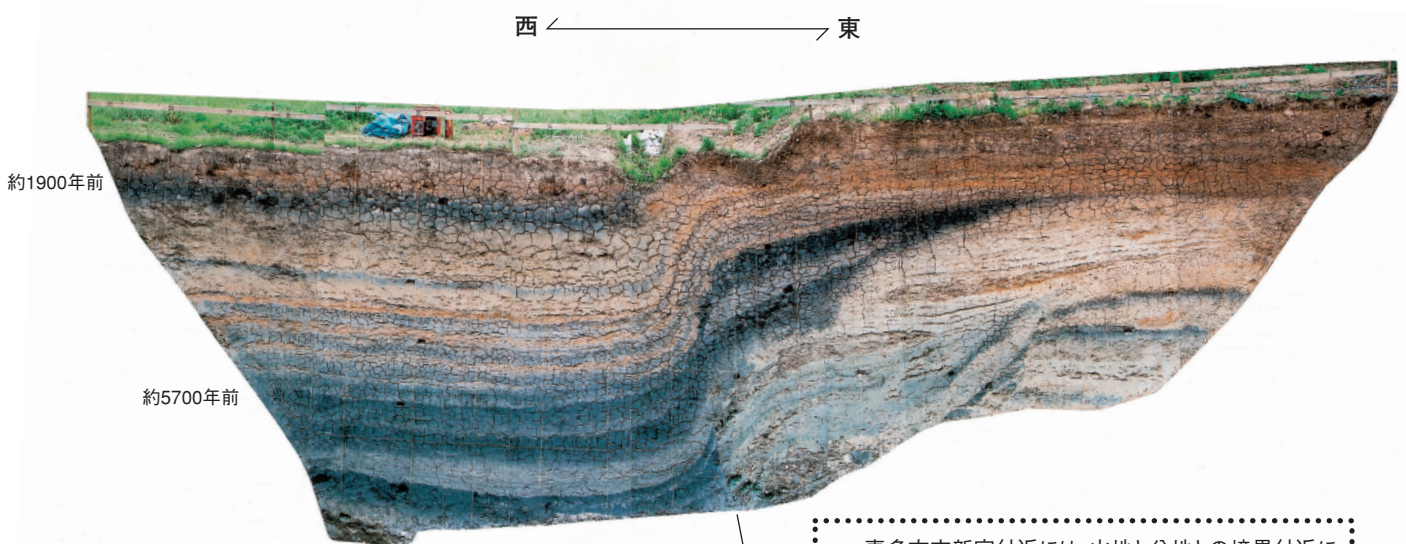
(注) 松田(1975)による経験式

M=マグニチュード、L=断層の長さ(km)、D=1回の変位量(m)

$M = (\log L + 2.9) / 0.6$ 、 $M = (\log D + 4) / 0.6$



会津坂下町見明における反射探査の結果



新宮第2トレンチ北側壁面写真

喜多方市新宮付近には、山地と盆地との境界付近にバルジ状の地形(活断層によって地表に生じた凸型のふくらみ)がみられ、そのバルジ状地形の前面(東側)には主断層が、背後(西側)には副断層(バックスラスト)が存在しています。

新宮第2トレンチでは、バックスラストを掘削したために、断層活動によるずれの方向が主断層と逆になっています。